3章 人気メーカーがこれから求める人材

日本の製造業が今後も発展していくかどうかは、これからものづくりに関わっていく人たちの力に懸かっています。企業は若者にどのような期待をし、また、どのような未来を託そうとしているのでしょうか。日本のものづくりを代表する人気企業に採用や育成の実態を聞いてきました。

取材・文／荒尾貴正（本誌編集デスク）　写真提供／牧野フライス製作所

Honda

日本の「ものづくり」を代表するグローバル企業

大手自動車メーカーのHondaは、従業員数約18万人、売上規模10兆円という日本を代表するメーカーだ。欧米や中国での大規模な現地生産をいち早くスタートしたり、自動車、オートバイ以外にもロボットやジェット機などの最新技術を追求したり、環境問題に積極的に取り組むなど、これまで日本の「ものづくり」をリードしてきたのと共に、今後も各メーカーの目標であり続ける企業といっていいだろう。そのHondaがこれからの時代に求めるのは、どのような人材なのだろうか。

Hondaが求める人材像は、創業当初から変わっていない。それは、次の4つのポイントに集約されているという。

- ●「夢」「志」の実現に向けて全力を尽くせる人
- ●自発的・積極的に行動し、プロセスを大事にする人
- ●柔軟な思考・発想で物事に取り組める人
- ●互いに違いを認め合い個性を尊重できる人

こうした言葉に代表されるHondaの風土にマッチした人が採用されるわけだが、その風土をもう少し具体的に説明したい。

例えば学歴について。Hondaの採用は「高卒」「大卒（高専、大学院含む）」「中途」の3種類あるが、どの入り口から入っても、入ったあとの扱いは皆同じだ。一般職や総合職、技能職や技術職といった区分けはなく、学歴によって職場や職種が決まることはない。つまり、高卒者も大卒者も、工場や研究所、本社など、どこでも働くチャンスがある。売上の8割を海外が占めるグローバル企業なだけに、海外で働く機会も当然ある。また学歴により、昇進のスピードや給与があらかじめ決まっているということもない。従って、高卒の人が大卒の人を上回るケースもある。

「本人次第で自由に、どこまでもチャンスを追求していける会社なので、ぜひそういう前向きな人に入っていただきたい。それが当社の希望です」（本田技研工業株式会社 人事部採用グループリーダー 中西貴之氏）

学歴無用学力有用。専門性より主体性

2011年度の入社予定者は高卒195人、大卒（高専、大学院含む）395人。大卒は45人のみ事務系職種で、残りは技術系職種。技術系職種への応募形態は、学校推薦と自由応募がほぼ半々の比率だ。一般に理系

学生の就職は文系学生とは違い、大学や研究室からの「推薦」で決まることが多い。自動車メーカーも理系学生の8～9割を推薦で採るのが一般的といわれるなか、この会社のスタンスは珍しい。

また、技術系職種の大卒と院卒の比率は、院卒がやや多いが、ほぼ半々ずつ。院卒が8～9割を占める他社と比較し、この割合も特徴的だ。「多様な人材がほしいという想いが強く、高学歴に越したことはない、といった考えはありません」(中西氏)

従って大学大学院のあらゆる学部学科から応募できる。

Ｈｏｎｄａには本田宗一郎氏の時代から「学歴無用学力有用」という言葉がある。「学力とは、偏差値や学業成績ではなく、学んでいこうとする姿勢や、そのベースとなる基礎的な学力、考える力などを指しています」(本田技研工業株式会社 人事部人事ブロックリーダー 斎藤 毅氏)

そして、「主体性」が問われる。学生時代に自分なりの考えをもって、何かに打ち込んできたか。さらに、自分の将来について「夢」が語れるか。グローバル企業だが、語学力は必須ではないという。グローバルに活躍できる条件は、語学よりも「タフなこと」「異文化を許容できること」「自分の核があること」などと考えており、面接ではそのあたりをじっくりと見きわめる。

「ややもすると〝大企業〟〝先進技術〟といったイメージ先行で応募してくる学生さんがいますが、夢の実現に向けて、現場でコツコツと、泥臭く、ものづくりをしているというのが当社の現実で、そこにＨｏｎｄａの真髄があると思っています。そういうところを理解して、当社を目指していただけたらありがたいですね」(斎藤氏)

大学から見える、製造業が求める人材像

就職が厳しい昨今でも、理工系大学の就職は堅調といわれる。ものつくり大学は09年度（10年度入社予定）、就職希望者240人に対して1300社以上から求人があった。トヨタ自動車や日立製作所など大手企業へ毎年就職者を輩出する同大学に、製造業が求める人材像や採用の実態について尋ねた。

「企業は新卒採用にあたって、学力や専門知識をあまり期待していないようです」とものつくり大学教授 森山茂夫氏（10p参照）は語る。大学で学ぶ程度の専門知識は企業に入ればすぐ身につくし、むしろ仕事で必要な知識は、入社して一から学び直すのが一般的という。「重視するのは**やる気とコミュニケーション能力**。ほとんどの企業がそうおっしゃいます」（森山氏）

実際のところ、この大学の卒業生も、成績優秀であれば引く手あまたかといえば、そうではない。いくつもの企業から内定を得る学生がいるが、そういう学生は総じてコミュニケーション能力が高く、相手に意欲が伝わりやすいタイプだ。「専門知識は入ってからでもいい。それより、教育すれば伸びそうだという『伸びしろ』を見ている気がしますね」（森山氏）

ものつくり大学の学生に関していえば、企業には「堅実な学生」と映っているようだ。この大学は学生に最短2ヶ月という長期インターンシップを課している。そうした経験によりものづくりの現場を理解し、現場の人たちとスムーズなやりとりができるようになる。その点が企業から評価されているという。

また、昨年あたりから**英語力**を求める企業が確実に増えてきた。「海外に工場を展開するなどといった理由ですが、中堅から上の企業は、ほとんどが英語力を問うようになっています」（森山氏）。ものつくり大学も4年間英語を学べるカリキュラムになっており、製造現場に特化した英語の授業もあるという。

牧野フライス製作所

世界の「ものづくり」を支える工作機械メーカー

携帯電話や自動車、航空機、宇宙船などはハイテクの集積といわれるが、これらの製品の元になる部品には、当然ながら極めて高い精度が求められる。その部品を作る機械が「工作機械」だ。機械を生み出す機械であるから「マザーマシン」とも呼ばれ、あらゆるものづくりの基盤技術ともいえる。日本はこの分野において世界最高の技術を誇るが（11p参照）、なかでもNASAや航空機メーカーから高い評価を受ける牧野フライス製作所は、最も技術力の高いメーカーのひとつである。事業所や関連会社は国内のみならず海外にも多く、製品の7割は海外で販売され、従業員約4000人のうち半数は外国人である。

日本における2011年度入社予定者は約70人。高卒者と大卒・院卒者がほぼ半々の割合だ。入社後は、高卒者は工場で工作機械の加工や組立を行う。大卒・院卒者は8割が技術系採用だが、その人たちは新製品開発に携わることになり、2割の事務系は営業や企画、経理、人事などを担当する。

工場は流れ作業ではなく、作業者は複数の工程を受け持つ「多能工」だ。工作機械はその先端でミクロの世界を作り出すが、支える本体は数トンもの金属から成る。金属は温度により変化するので、微妙な調整を人の手で行う。そのためには摩擦や抵抗、機械の仕組みなどについての基本的な知識も必要だ。

「ものづくりに対する情熱が一番大切なのですが、それだけだと現場で空回りしてしまうケースがあります。だから採用の際は、数学や物理の成績や筆記試験の結果も参考にするようにしています」（同社総務部ゼネラルマネージャ 矢澤孝二氏）

熟練技術をどう継承していくかも、こうしたメーカーの課題だ。しかし牧野フライス製作所では、このところそうした技術を学びたい若手社員が増えているという。教育制度や資格制度などを整備して、会社としても万全の支援を行っている。

生産現場を見学し その世界に共感できるか

大卒・院卒者は学校推薦で応募してくるケースが多い。工作機械や金属、熱伝導といった分野で最先端の研究をしている大学の研究室からも毎年入社してくる。自由応募枠

で入ってくる理系学生もいるが、大卒・院卒者は総じて熱心に研究をしてきた学生が多いという。

「最先端の工作機械を作れるという点に魅力を感じて応募してくる学生さんが多いですね。なかには面接で、『こんな工作機械を作りたい』とか『工作機械でこんな製品を作りたい』といった具体的な夢を語ってくれる頼もしい人もいて、そういう人は評価が高いです」(矢澤氏)

工作機械の市場として日本は飽和状態になりつつあり、海外へ大きく展開していこうと各社がしのぎを削り合っている段階だ。この会社は1970年代から海外展開をしており、事務系の採用では「英語はできて当たり前」(矢澤氏)という。技術系も仕事で英語を使う場面は年々増えている。会社として、今後は欧米や東南アジアのみならずロシアや南米、アフリカなどへも進出したいといい、語学力はますます求められていくようだ。

以上のように学業成績や専門知識、語学力など求めたいスキルは多いが、採用場面で牧野フライス製作所が最も大切にしているのは、高校生にも大学生にも工場を見学してもらい、この会社のものづくりに共感してもらうことだという。

「マキノの文化に共鳴し、そのなかに自分の可能性を見出せるかどうか。当社とものづくりに対する想いが一致している人であれば、存分に活躍できるフィールドがあると思います」(矢澤氏)

中田製作所

切削加工技術に定評のある25人の会社

工作機械などを用いて、アルミ製の精密部品の切削加工を行っているのが中田製作所である(20p参照)。半導体製造装置や液晶製造装置、医療医薬機器などの部品加工を引き受け、「なにわの名工」や「ものづくり日本大賞優秀賞」などを受賞するほど技術力には定評がある。熟練者が初心者に対して、わからないところをわかるまで何度でも教えていくというところが会社の良き伝統となり、強みになっているという。

従業員数25人という小さなメーカーだが、近年は新卒者を毎年3人採用している。条件は高卒以上。工業高校や大学工学部を出ていれば多少評価は変わるが、学歴よりも重視するのは「やる気」だ。

「学生時代に何かに打ち込んだ経験のある人は、やはり目の輝きが違いますね。私はそういうところを見るようにしています。勉強でもいいし、クラブ活動でもいいですが、とりわけ運動部でチームをまとめ、引っ張ってきたような人は魅力的ですね。チームワークの大切さを知っていることは、会社で働くうえで貴重だと思います」(同社代表取締役 中田 寛氏)

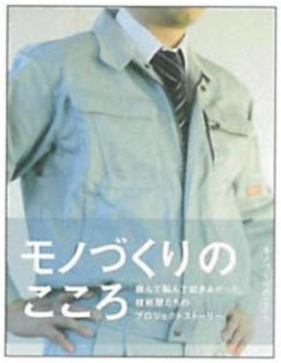
ボルトとナットでやる気を見る

採用試験では、小さなボルトとナットを1分間でいくつはめられるかをテストする。手先の器用さを見るためのテストだと伝えるが、不器用だから落とすということはない。実は器用さよりも、一所懸命取り組める人かどうかを見るのだという。

ルートの計算など、簡単な学力テストも行っている。これもやる気を見るためのテスト。できなければ再度勉強し直すチャンスを与え、それでもできなければ意欲に欠けると見なすしかない。

このように、働く意欲やものづくりに対する想い、また、人の立場に立って考えられるかどうかが重視される会社だという。

2010年度版「モノづくり冊子」発刊のお知らせ



(この表紙は2009年度版です)

小社では、理系大学生の就職活動をサポートするために、日本が誇る製造業で働くエンジニアを紹介する冊子を毎年発行しています。
エンジニアとして働くことの魅力とは何なのか。その答えは、製品という結果ではなく、技術という道具でもなく、製品が生まれてくるまでのプロセスにこそあるのではないでしょうか。
この冊子では、一人の技術者が「どのような想いをもってプロジェクトに立ち向かい、壁にぶつかり、乗り越え、実現していったか」そのプロセスを伝えていきます。
ぜひ、工業高校で学ぶ生徒や理系の大学進学を考えている生徒など、今後「モノづくり」を目指す可能性のある高校生たちへの指導にお役立ていただければ幸いです。
以下の方法にてお申し込みください。

①巻末の読者はがきでお申込みください
②monozukuri@r.recruit.co.jp宛に、お届け先の詳細および希望冊数をご連絡ください
※在庫がなくなり次第、配送受付を終了とさせていただきます。

【掲載予定企業】※2010.9.3現在
本田技研工業、三菱電機、新日本製鉄、富士重工業、森精機、シスメックス、経済産業省